

東京藝術大学大学美術館 | 年報・紀要  
[平成31年・令和元年度]

The University Art Museum | Annual Report / Bulletin  
Tokyo University of the Arts | April 2019 — March 2020

年報 | Annual Report

- 2 所蔵品登録数  
Number of Works Registered
- 3 展覧会記録  
Report of Exhibitions and Events
- 8 新収蔵品  
New Acquisitions
  - 13 新収蔵品解説  
New Acquisition Reports
- 15 所蔵品館外貸出記録  
Record of Loan Requests and Approvals
- 21 芸術資料に関する写真撮影等状況  
Photographic Reproduction of the Collection
- 21 芸術資料閲覧および使用許可状況  
Viewing and Use of the Collection
- 22 修復リスト  
Restoration List
- 24 博物館学講座学芸員課程  
Curatorial Studies Program of Museology Course
- 25 報告  
平成30年(2018) 取手館収蔵庫内で発生した黴への対応について
- 26 組織構成  
Organizational Chart
- 27 名簿  
List of Staff and Committee Members
  - 東京藝術大学大学美術館 評議員会
  - 東京藝術大学大学美術館 運営委員会
  - 東京藝術大学大学美術館 職員
- 28 施設概要  
Facilities Overview

紀要 | Bulletin

- 30 研究報告  
Research Report
  - 古田 亮 研究ノート  
雪村画における「呂洞賓」と「西域方士」の画題をめぐって
  - 中江花菜 長尾建吉による東京美術学校納入作品と額縁
  - 松永亮太 大学美術館取手館におけるIPMの導入——事務エリアの清浄化に向けて
  - 松村智郁子 明治期の日本人とヴァイオリン(2)  
——製造者、教育環境、刊行物、奏楽図、当時の軌跡を辿る——

## 1. はじめに

東京藝術大学美術学部の前身である東京美術学校が1896年(明治29)に新設した西洋画科では、黒田清輝のリーダーシップのもと、学生たちの参考となる油画作品を継続的に収集してきた。現在も本学に収蔵されるこれらの参考作品のうち、西洋画科の草創期、特に明治30年代に集められた作品の多くには一つの共通点がある——それは長尾建吉という人物から買入・納入された作品であるということだ。長尾建吉は明治期中葉に日本初の洋風額縁を製造した額縁屋として知られる。明治期以降、国内では洋画団体の活動が活発化するにつれて、絵画作品が展覧会の場で頻りに展示されるようになり、作品を壁面に固定する枠組み、すなわち額縁の製造が喫緊の課題となった。長尾は西洋の額縁の意匠や製造技法を取り入れながら、各々の作品や日本の展示空間に見合う額縁を開発した。長尾が製作した額縁は東京美術学校(以下、美校と略す)への納入作品にも取り付けられている。執筆者は彼が製作した額縁についての研究を進めており、本稿ではその序論として長尾建吉という人物、ならびに美校への納入作品とその額縁について、基本情報を紹介したい。

## 2. 長尾建吉について<sup>註1)</sup>

長尾建吉は、1860年(萬延元)に静岡県研屋町(現在の静岡県静岡市葵区)で刀研師組頭であった磯谷利右衛門の三男として生まれた。1874年(明治7)に上京、日本橋住吉町(現在の東京都中央区日本橋人形町)の斎藤善兵衛商店に入店、1878年(明治11)には松方正義総裁の随員として第3回パリ万国博覧会へ派遣される。このときに事務局員として同行していた画家・山本芳翠(1850-1906)と知り合った。翌年には、シドニー万国博覧会に静岡県嘱託として派遣された。1879年(明治12)、斎藤商店の支店開設のため、外務省一等書記官江木高遠とともに渡米、次いで欧州での商機獲得のため、ロンドン、パリへと渡った。パリ滞在中には画商・林忠正と知遇を得たのみならず、留学中の山本芳翠と再会し、リュクサンブール宮やルーヴル美術館をともに鑑賞したという。江木の死を受け、1881年(明治14)に長尾は帰国、商店を辞して故郷静岡に戻り、静岡漆器の開発・研究に勤しんだ。

長尾は1888年(明治21)に再度上京し、兄の下で塗物師として働いた。翌年に当時入院していた山本芳翠を見舞ったところ、

「額縁をこしらへて見たらどうか」<sup>註2)</sup>

と声をかけられ、芝区烏森町5番地にあった山本の洋風額縁研究所に入所。これが転機となり長尾は洋風額縁の製造に進むこととなる。のちに長尾はこのように回想している。

「〔額縁を〕こしらへると云つても、私には解らないので、山本さん(山本芳翠)がフランスから製造法の書いた、本を持つて歸つておまして、それに依つて研究したのでしたが、なかなか型が抜けないので、三年もかゝつて初めて模様らしいものが出来ました譯です。」<sup>註3)</sup>

1892年(明治25)にこの研究所が火災に見舞われると、芝区愛宕2丁目14番地に新たに工房を構えた。美校の西洋画科新設後は、黒田清輝

(1866-1924)の計らいで学校に出入りし画材を納めたという。すでにこの頃には額縁を制作していたが、

「皆繪が賣れなかつたから額縁の金などよこす人は少なく、私ももらはうと思わなかつたのです。黒田さん〔黒田清輝〕の繪が七圓で賣れなかつた時代ですもの、なかへゝ賣れるものではない。〔…〕値段などにかゝらず、誰といふこともなしに、展覧會出品に困つてゐる人にはこしらへて上げたものです。」<sup>註4)</sup>

といい、事実、長尾は持ち合わせのない学生にも快く額縁を作つてやつたという証言が数多く残っている。1904年(明治37)、京橋区竹川町の商栄館に日本初の洋画の常設展示会場を設けた。1905年(明治38)、芝区新櫻田町19番地に移転し、屋号を磯谷商店と掲げた。この年には、同商店と懇意にしていた洋画家らと雑誌『L・S』を創刊した(2刊のみ発行して廃刊)。1908年(明治41)の第1回文部省美術展覧会(文展)では洋画の展示にも携わつた。1918年(大正7)に静岡に戻つたが、生涯にわたり洋画家たちとの親交は続いた。1930年(昭和5)には古希を祝して大々的に生別会が行われ、1938年(昭和13)に79歳で生涯を閉じた。長尾建吉の生涯は、息子の一平が編んだ『嶽陽 長尾建吉』(私家版、1936年)の中で書簡や関連記事を織り交ぜながら紹介されている。同書は表紙の題字や装幀を東京美術学校の校長を長年勤めた正木直彦が、序文を和田英作が手がけ、その上74名もの画家や著名人が長尾とのエピソードを寄せていることから、彼が芸術家たちからどれだけ慕われていたか知ることができよう。

## 3. 長尾建吉と白馬会会員たち

長尾が美校へ作品を納入した背景には、黒田清輝との交友、そして洋画団体・白馬会の存在があつただろう。長尾は山本芳翠を介して、黒田と知り合ったと考えられる。長尾は黒田から額縁や画材納品の個人的な注文、作品の配送依頼などを受けていたが、特に白馬会の展示について厚い信頼を寄せられていたようだ。よく知られるように、展覧会の開催は白馬会の活動の中でも、最も重要なものに位置付けられる。黒田は長尾に、

「今度の展覧會の事で明晩めし後七時に生巧館に皆集て相談會を開く就而君も來て居た方が額縁や何かの相談が其場で出來ていゝから若し都合がよければ出席して呉れ。」(1898年〔明治31〕9月18日)

という手紙を送っていることがその証左となるだろう<sup>註5)</sup>。送付日から推測するに、「今度の展覧會」は同年10月5日から開會する第3回白馬会展覧会を指し、長尾が出品作の額縁を手掛けた可能性がうかがえる。また、画家・宇和川通諭の回想では、白馬会の陳列時に黒田や藤島武二らと友人のように話す年配の人物が、威勢よく、おい北、おい白滝と呼び捨てにして作品に毒舌を吐くところを見た。誰もそれを怒る様子がないので不思議に思っていると、

「あれは磯谷商店と言ふ額縁屋の主人で長尾と言ふ人だ。あんな風をしているがなかへゝ偉い人だ、今に君達もあのおやぢさんにやられるんだ」<sup>註6)</sup>

と言われ、長尾の存在を知ったという。この証言からも長尾が白馬会の展示に積極的に関与していたことは明白だろう<sup>註7)</sup>。

さて、白馬会に出品した画家たち、とりわけ生巧館をはじめ美校で学んだ画家たちと長尾の関係は一層深いものであった。展覧会に出品したいが金に困っていた学生に、長尾が額縁を作ってやったというのは先述の通りである。これに加えて、長尾は当時画学生であった白滝幾之助(1873-1960)、北蓮蔵(1876-1949)、矢崎千代二(1872-1947)、郡司卯之助(1879-?)らを、書生として愛宕町二丁目の邸に寄宿させていた。矢崎千代二は、

「一八九八年であつたと思ふ私は愛宕下の御店に厄介になつて居た。その頃は北、白瀧二氏やそれから郡司福秀、山形駒太郎、荻[ママ]原蔵君、後和田三造君が皆食客で、その上岡田、和田(英)湯浅諸君など自分の家の様に入出して二階八畳はいつも満員であつた[...]<sup>註8)</sup>

と話しており、数多くの学生が長尾の家に転がり込んでいたことが分かる。矢崎の回想には一部記憶違いがあり、萩原蔵は1909年に長尾邸の書生となったが、店の掃除や額縁の発送、集金、カンヴァス張りやガラス拭きなど店を手伝いながら、白馬会養橋洋画研究所の夜間部に通ったという<sup>註9)</sup>。おそらくはその他の書生となった学生も長尾邸で同様に世話になりながら創作を続けたのだろう。白滝幾之助は、美校の西洋画科の卒業制作にして代表作といえる第2回白馬会展出品作《稽古》(図1)を、長尾の額縁屋の近所にあった三味線の師匠の家で描いたといい、お師匠さん役は額縁店の職人の息子の嫁、三味線を弾く少女は長尾の娘をモデルにしたと伝えられている<sup>註10)</sup>。

長尾邸に寄宿した画学生たちはヨーロッパへの留学を果たすと、当地から額縁製造に役立つ情報や書籍を長尾へ送った。白滝幾之助は留学先のロンドンから

「額縁の参考になるカタログでも送り度いと人にも頼み自分でも氣を着けてみる[...]

といい、そして西洋での額縁製造法が分かれば連絡すると書いて寄こ



図1 白滝幾之助《稽古》(学生制作品1181)

した<sup>註11)</sup>。和田英作もまた、

「額縁の見本になるかと思ふからミニアチュール展覧會の古いカタログを送る 見てくれ」

と記した絵葉書をパリから長尾に送っている<sup>註12)</sup>。現在までのところ、彼らが送った図録は具体的に明らかではない。だが、こうした態度には長尾の恩義に報いようとする機運のみならず、自分たちの作品に対して額縁がいかに重要な役割を果たしているかを洋画家たちが十分に理解していたことがうかがえるだろう。

以上のことから、長尾建吉は黒田清輝をはじめとする美校の教授陣はじめ、白馬会の画家たちから「額縁」を通じて多大なる信頼を得ていたことが確認できるだろう。白馬会展覧会での優秀作品は後進の画家たちの参考事例となるように美校が買い上げたが、これは長尾が学校に納入したものであった。

#### 4. 長尾建吉による東京美術学校への納入作品

下記に記す表は、長尾が美校に納入した作品のうち、現在本学に登録されている152作品の一覧である(表1)。しかしながら、東京美術学

【表1】 現収蔵作品における、長尾建吉の東京美術学校納入作品一覧

種別番号	作者	名称	制作年代	技法・材料
明治29年10月27日 買入・納入				
文化財26(重要文化財)	浅井忠(1856-1907)	収穫	明治23年	油彩/カンヴァス
西洋画1	原作:ベルナルディーノ・ルイーニ 模写:久米桂一郎	小児と葡萄	明治25年	油彩/カンヴァス
西洋画2	原作:パリス・ボルドーネ 模写:久米桂一郎	二人の若者の肖像	—	油彩/カンヴァス
西洋画3	山本芳翠(1850-1906)	西洋婦人像	明治15年	油彩/板
西洋画4	山本芳翠(1850-1906)	ベルサイユ公園	—	油彩/紙
明治29年11月19日 買入・納入				
西洋画6	松岡 寿(1862-1944)	凱旋門	明治15年	油彩/カンヴァス
西洋画7	久米桂一郎(1866-1934)	寒林枯葉	明治24年	油彩/カンヴァス
西洋画8	久米桂一郎(1866-1934)	鴨川	明治27年	油彩/カンヴァス
西洋画10	原田直次郎(1863-1899)	老人	明治19年頃	油彩/カンヴァス
西洋画11	安藤伸太郎(1861-1912)	東寺	—	油彩/カンヴァス
西洋画12	藤島武二(1867-1943)	春の小川	—	水彩/紙
西洋画13	岡田三郎助(1869-1939)	矢口村の朝	—	油彩/カンヴァス
西洋画14	岡田三郎助(1869-1939)	浜の夕暮	—	油彩/カンヴァス
西洋画15	小代為重(1861-1951)	浜辺枯草	明治29年	油彩/カンヴァス
西洋画16	黒田清輝(1866-1924)	菊園	明治28年	油彩/カンヴァス
明治29年12月3日 買入・納入				
文化財32(重要文化財)	原田直次郎(1863-1899)	鞆屋の親爺	明治19年	油彩/カンヴァス
学生制作品2505	白滝幾之助(1873-1960)	矢口の渡	明治29年	油彩/板
学生制作品2506	湯浅一郎(1868-1931)	海	—	油彩/板
学生制作品2507	湯浅一郎(1868-1931)	海	—	油彩/板
学生制作品2508	和田英作(1874-1959)	春雨	明治29年	油彩/板
学生制作品2509	和田英作(1874-1959)	田圃夕陽	明治29年	油彩/板
明治31年3月18日 買入・納入				
学生制作品1181	白滝幾之助(1873-1960)	稽古	明治30年	油彩/カンヴァス

種別番号	作者	名称	制作年代	技法・材料
明治31年4月11日 買入・納入				
西洋画21	和田英作 (1874-1959)	少女新聞を読む	明治30年	油彩/カンヴァス
西洋画22	和田英作 (1874-1959)	秋草	明治30年	油彩/カンヴァス
西洋画23	和田英作 (1874-1959)	貝拾い	明治30年	油彩/板
西洋画24	藤島武二 (1867-1943)	逍遙	明治30年	油彩/カンヴァス
学生制作品2510	白滝幾之助 (1873-1960)	冬の浜辺	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2511	白滝幾之助 (1873-1960)	みぞれ	—	油彩/板
学生制作品2512	白滝幾之助 (1873-1960)	晩景	—	油彩/板
学生制作品2513	小林萬吾 (1870-1947)	夕暮	—	油彩/カンヴァス
明治31年5月26日 買入・納入				
西洋画25	原作: ヘルナルティーン・ルイーニ 模写: 黒田清輝	耶蘇降誕	—	油彩/カンヴァス
明治31年12月18日 買入・納入				
西洋画29	赤松麟作 (1878-1953)	池	—	油彩/カンヴァス
西洋画30	田中寅三 (1876-1961)	曇天の夕	—	油彩/カンヴァス
明治31年12月31日 買入・納入				
西洋画26	藤島武二 (1867-1943)	浜辺の朝	—	油彩/カンヴァス
西洋画27	中村勝治郎 (1866-1922)	農家の雨	—	油彩/板
学生制作品1182	湯浅一郎 (1868-1931)	漁夫晩帰	明治31年	油彩/カンヴァス
学生制作品1183	小林萬吾 (1870-1947)	農夫晩帰	明治31年	油彩/カンヴァス
学生制作品2514	丹羽林平 (1870-1919)	蓮田	—	油彩/板
学生制作品2515	白滝幾之助 (1873-1960)	雨中	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2516	白滝幾之助 (1873-1960)	雨後	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2517	北 蓮蔵 (1876-1949)	深林	—	油彩/板
学生制作品2518	北 蓮蔵 (1876-1949)	裏門	明治31年	油彩/板
学生制作品2519	北 蓮蔵 (1876-1949)	雪	明治31年	油彩/板
学生制作品2520	広瀬勝平 (1877-1920)	磯	明治31年	油彩/カンヴァス
学生制作品2521	山本森之助 (1877-1928)	林間草花	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2522	山本森之助 (1877-1928)	夕暮	—	油彩/板
学生制作品2523	磯田喜作 (1874-1941)	磯ノ崎	明治31年	油彩/カンヴァス
学生制作品2524	原田竹二郎 (1872-1921)	夕暮	明治31年	油彩/カンヴァス
学生制作品2525	椎塚修房 (?-1910)	田家初春	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2526	赤松麟作 (1878-1953)	読書	明治31年	油彩/カンヴァス
学生制作品2527	田中寅三 (1876-1961)	残菊	—	油彩/板
学生制作品2528	磯野吉雄 (1875-1948)	たそがれ	—	油彩/板
学生制作品2529	中沢弘光 (1874-1964)	秋の朝	明治31年	油彩/カンヴァス
学生制作品2530	矢崎千代二 (1872-1947)	海	—	油彩/板
明治32年12月18日 買入・納入				
西洋画28	広瀬勝平 (1877-1920)	夕日	明治32年	油彩/板
西洋画31	北 蓮蔵 (1876-1949)	御殿山の雪	—	油彩/板
西洋画32	小林萬吾 (1870-1947)	冬野	明治32年	油彩/板
西洋画33	白滝幾之助 (1873-1960)	草刈塵	明治32年	油彩/カンヴァス
西洋画34	山本森之助 (1877-1928)	柳塘	—	油彩/カンヴァス
西洋画35	藤島武二 (1867-1943)	花	—	油彩/板
西洋画36	和田英作 (1874-1959)	ミッドルス・ブルグ	明治32年	油彩/板
西洋画37	中村勝治郎 (1866-1922)	夕暮	—	油彩/板
西洋画38	長原孝太郎 (1864-1930)	口レンツォ・メチチ像	—	木炭/紙
西洋画39	三宅克己 (1874-1954)	ニューヘヴンの雪	明治21年	水彩/紙
西洋画40	三宅克己 (1874-1954)	ハムプステッドの深林	明治31年	水彩/紙
学生制作品2556	磯野吉雄 (1875-1948)	萩	明治32年	油彩/板
学生制作品2557	小西正太郎 (1876-1958)	残雪	明治31年	油彩/板
学生制作品2558	塩見 競 (1879-1922)	根岸の残照	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2559	森川松之助 (1874-1918)	風景	明治31年	油彩/板
学生制作品2560	龍田精三 (1876-?)	雲間を洩るる光	明治32年	油彩/板
学生制作品2561	中丸藤一	磯辺	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2562	中沢弘光 (1874-1964)	浜の夕映	明治32年	油彩/板
学生制作品2563	矢崎千代二 (1872-1947)	首夏	明治32年	油彩/板
明治33年11月13日 買入・納入				
西洋画43	フリッパス・ワウエルマン (1619-1668) に帰属	馬	—	油彩/板
西洋画44	作者不詳	婦人像	—	油彩/カンヴァス
西洋画45	作者不詳	人物夜景	—	油彩/板
西洋画46	伝ジョヴァンニ・バッティスタ・ティエボロ (1696-1770)	聖母被昇天?	—	油彩/紙
西洋画47	中沢弘光 (1874-1964)	少婦	明治33年	油彩/カンヴァス
西洋画48	矢崎千代二 (1872-1947)	教鷲	明治33年	油彩/カンヴァス
西洋画49	山本森之助 (1877-1928)	風景	明治33年	油彩/カンヴァス
明治33年11月28日 買入・納入				
西洋画50	田中寅三 (1876-1961)	山村の夕暮	—	油彩/カンヴァス
西洋画51	湯浅一郎 (1868-1931)	風雲	—	油彩/カンヴァス
西洋画52	北 蓮蔵 (1876-1949)	宿場の雨	—	油彩/板
西洋画53	原田竹二郎 (1872-1921)	梅園	—	油彩/カンヴァス
西洋画54	原田竹二郎 (1872-1921)	雪景	—	油彩/板
西洋画55	磯野吉雄 (1875-1948)	土舟	—	油彩/板
西洋画56	三宅克己 (1874-1954)	雨模様	明治32年	水彩/紙

種別番号	作者	名称	制作年代	技法・材料
西洋画57	岡田三郎助(1869-1939)	月夜	明治32年	パステル/紙
西洋画58	長原孝太郎(1864-1930)	風景	明治32年	油彩/板
西洋画59	小林萬吾(1870-1947)	駄馬	—	油彩/板
西洋画60	中村勝治郎(1866-1922)	川辺の夕暮	—	油彩/板
西洋画61	藤島武二(1867-1943)	雪の夕暮	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2564	森川松之助(1874-1918)	根岸の細道	—	油彩/板
学生制作品2565	内野 猛(1878-?)	風景	明治33年	油彩/板
学生制作品2566	郡司卯之助(1879-?)	池辺の家	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2567	木元鐘吉	水辺の初夏	明治33年	油彩/カンヴァス
学生制作品2568	宇和川通諭(1877-1942)	風景	明治33年	油彩/板
学生制作品2569	塩見 競(1879-1922)	溪流	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2570	出口清三郎(1881-1965)	黄昏	明治31年	油彩/板
明治34年12月3日 買入・納入				
西洋画71	白滝幾之助(1873-1960)	春雨	—	油彩/板
西洋画72	湯浅一郎(1868-1931)	御殿場	—	油彩/板
西洋画73	湯浅一郎(1868-1931)	風景	—	油彩/カンヴァス
西洋画74	磯野吉雄(1875-1948)	田圃の斜陽	明治31年	油彩/板
西洋画75	金澤悌次郎(?-1919)	冬の朝	—	油彩/カンヴァス
西洋画76	岡吉枝	水村	—	油彩/カンヴァス
西洋画77	中沢弘光(1874-1964)	残春	明治34年	油彩/カンヴァス
西洋画78	中沢弘光(1874-1964)	八坂の塔	明治34年	油彩/カンヴァス
学生制作品1184	赤松麟作(1878-1953)	夜汽車	明治34年	油彩/カンヴァス
学生制作品2571	塩見 競(1879-1922)	雨中の波	—	油彩/板
学生制作品2572	森川松之助(1874-1918)	雨	—	油彩/板
学生制作品2573	宇和川通諭(1877-?)	風景	明治34年	油彩/カンヴァス
学生制作品2574	戸田謙二(1878-?)	朝風	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2575	郡司卯之助(1879-?)	根岸の春	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2576	跡見 泰(1884-1953)	風景	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2577	内野 猛(1878-?)	浜辺の家	—	油彩/板
明治35年7月5日 買入・納入				
西洋画81	原作: レンブラント・ファン・レイン 模写: 岡田三郎助	自画像	—	油彩/カンヴァス
明治36年1月28日 買入・納入				
西洋画85	白滝幾之助(1873-1960)	晩春	明治35年	油彩/カンヴァス
西洋画86	湯浅一郎(1868-1931)	燈下読書	—	油彩/カンヴァス
西洋画87	大東昌可(1878-1945)	秋景色	—	油彩/カンヴァス
西洋画88	塩見 競(1879-1922)	葱洗い	—	油彩/カンヴァス
西洋画89	森川松之助(1874-1918)	紅葉	—	油彩/カンヴァス
西洋画90	小林萬吾(1870-1947)	田舎家	—	油彩/カンヴァス
西洋画91	山本森之助(1877-1928)	琉球の燈台	—	油彩/カンヴァス
西洋画92	時任雕熊(1874-1932)	風景	—	油彩/カンヴァス
西洋画93	柴崎恒信(?-1936)	風景	—	油彩/板
西洋画94	椎塚修房(?-1910)	雪	—	油彩/板
西洋画95	中村勝治郎(1866-1922)	洗い場	—	油彩/板
西洋画96	金澤悌次郎(?-1919)	芒	—	油彩/板
西洋画97	岡野 栄(1880-1942)	雨後の桜	明治35年	油彩/板
西洋画98	丹羽林平(1870-1919)	菜の花	—	油彩/板
学生制作品2583	三井由太郎(1875-1956)	夕景	明治35年	油彩/カンヴァス
学生制作品2584	橋本邦助(1884-1953)	駅路の夕景	—	油彩/板
学生制作品2585	橋口 清(1881-1921)	風景	—	油彩/板
学生制作品2586	郡司卯之助(1879-?)	寺	—	油彩/カンヴァス
学生制作品2587	高木背水(1877-1943)	冬の夕暮	—	油彩/板
明治36年11月9日 買入・納入				
西洋画114	長原孝太郎(1864-1930)	躑躅花	—	油彩/カンヴァス
西洋画115	中村勝治郎(1866-1922)	芥子花	—	油彩/カンヴァス
西洋画116	郡司卯之助(1879-?)	村落の暮	—	油彩/板
西洋画117	小林鐘吉(1877-1946)	船	明治36年	油彩/カンヴァス
西洋画118	跡見 泰(1884-1953)	月	—	油彩/カンヴァス
西洋画119	橋本邦助(1884-1953)	静物	明治36年	油彩/カンヴァス
西洋画120	森岡柳蔵(1878-1961)	夕立の雲	—	油彩/板
西洋画121	大八木一郎(1869-?)	風景	—	水彩/紙
西洋画122	森川松之助(1874-1918)	唐澤山	明治36年	油彩/カンヴァス
西洋画123	中沢弘光(1874-1964)	舞妓の顔	明治36年	水彩/紙
西洋画124	湯浅一郎(1868-1931)	道頓堀	—	油彩/板
西洋画125	吉田六郎	風景	—	油彩/カンヴァス
西洋画126	内野 猛(1878-?)	雪	—	油彩/板
西洋画127	龍田精三(1876-?)	風景	—	油彩/板
明治42年9月29日 買入・納入				
西洋画192	矢崎千代二(1872-1947)	エルベ河の雨	明治41年	油彩/カンヴァス
西洋画193	矢崎千代二(1872-1947)	英国ハムプトンコート	—	油彩/カンヴァス
大正3年12月21日 買入・納入				
西洋画330	久米桂一郎(1866-1934)	夏の夕(鎌倉)	明治27年	油彩/カンヴァス

校文庫の旧備品台帳簿をひも解くと、長尾が納入した作品群の中には関東大震災や戦災で作品が損傷・焼失し除籍処分となった作品もあることから、長尾による実際の納品数はこの数よりも多かった<sup>註13)</sup>。本表から読み取ることができるように、作品の納入は明治31年から明治36年にかけてのわずか6年間に集中している。長尾による作品納入の記録のうち、最も早いものは1896年(明治29)10月27日であり、この日を皮切りに作品納入は1914年(大正3)12月21日まで継続された。初回の納入作品は西洋絵画の模写や旧派の浅井忠の作品、フランスで学んだ山本芳翠の油彩といった学生制作の参考となる作品であったが、明治30年代には白馬会展覧会へ出品した美校の学生作品が納入作品の大部分を占めている<sup>註14)</sup>。納入日から判断するに、例年11月から12月に白馬会展覧会が閉幕した後、その年の年末に長尾が納入していたようである。

納入作品には長尾が額装を施しており、現在本学に収蔵される作品の多くには当時の額縁がそのまま取り付けられている。長尾が制作した額縁の下部には、作品名と作家名を手書きで記した紙製のネームプレートが小さなピンで取り付けられている。あえて金色で着彩された

ネームプレートは、西洋の額縁を模して取り付けられたに違いない(図2)。

額装のパターンは多岐にわたるが、幅広の板を入れ子状に組み合わせ、窓の周りに面金を施すのが基本的な形である(図3)。板の木目を隠すような塗装を施すことなく、自然な質感を残している。簡素ではあるが窓に面金を施すことにより、下塗りやワニスの塗布のない風景スケッチでさえその見栄えが格段に上がって見えるのだ。こうした板を基板とし、鍍金した棹状の装飾(モールディング)を窓の周りに取り付けられるのも数多くみられる(図4、5)。モールディングは月桂樹の葉を重ねたデザインで、一つ一つ手作業で彫り込むのではなく、型抜きのようなかたちで制作したものと推察される。月桂樹は西洋美術の伝統では詩作や芸術の象徴、そして勝利や永続性、純潔を表すモチーフだ<sup>註15)</sup>。

一方、細かな砂を撒いたようなざらざらした質感を出した額縁も数多くみられる。例えば、原田直次郎《靴屋の親爺》(図6)を囲むこの種の額は、窓に面金を施し、砂の撒かれた四辺が高く盛り上げられ、外縁に先述の月桂樹のモールディングが取り付けられる。長谷川昇が



図2 北蓮造《雪》(学生制作品2519) ネームプレート



図3 北蓮造《雪》(学生制作品2519)



図4 戸田謙二《朝風》(学生制作品2574)

図5 戸田謙二《朝風》(学生制作品2574) 額縁下部/モールディング

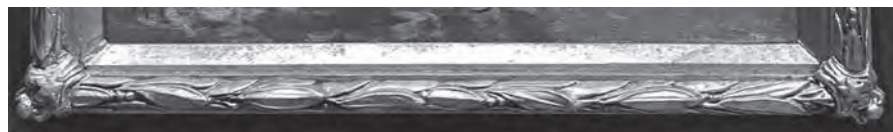


図6 原田直次郎《靴屋の親爺》(文化財32)



図7 「バターティオ額」18世紀後半、イギリス製、イェール大学付属ブリティッシュ・アート・センター蔵



図8 原田直次郎《靴屋の親爺》(文化財32) 撒砂部分

「最も廣く用ひられた椽と云へば砂金で中窪、周圍の高い部分には細い葉模様がついて居たもので、尚ほ四隅に唐草模様でもつけば上等の方でした。自分の繪をこの砂の額縁へ入れる事が無上の光榮で又楽しみでありました。」<sup>註16)</sup>

と回想するように、この砂の額縁は当時の画学生たちのあこがれの額縁であったのだろう。こうしたテクスチャーは、撒砂した上に鍍金する「サンディング(Sanding)」という西洋の額縁装飾法によく似ているが(図7)、サンディングに比べて砂の粒子が非常に細かいうえに、鍍金をせずにくいす色の落ち着いた仕上げが成され、むしろ日本の砂壁の質感に近いものを生み出している(図8)。

長尾の額縁の製作方法、特に先述のモールディングの型抜きやサンディングなどは、19世紀から20世紀初頭のイギリスやフランスにおいて普及していた製造方法と近似している。これは先述のとおり、山本芳翠の持ち帰った西洋の書籍から学び取った結果であろう。だが、長尾は板の木目をあえて隠すことはせず、また西洋の製造技法を日本風の技法に置き換えて制作するなど、日本の風土や展示環境に見合うよう想像力豊かに翻案して制作していると考えられる。長尾が創り出した額縁の意匠については、今後の研究課題とし稿を改めたい。

## 5. むすびに代えて

本稿では、長尾建吉その人と彼が美校に納入した作品、ならびに長尾が製造した額縁の概要を述べてきた。言わずもがな額縁はあくまで絵画作品の付属品である。西洋世界において、額縁は絵画を保護し、時代や地域の趣味を反映する室内装飾として発展を遂げてきた。だが残念ながら、日本では急速な欧米化とは裏腹に、西洋のように絵画を壁面に固定する習慣は根付かなかつた。明治期以降、日本に洋画の新風が吹き込み「展覧会」制度が誕生したことを機として、洋画には鑑賞者に恒常的に見られる機会が与えられ、絵を壁に据えるための「額縁」が必要になった<sup>註17)</sup>。ゆえに、日本における洋風額縁の成立、すなわち長尾の額縁制作の試行錯誤を追うことは、洋画が近代美術として成立する過程をも追うことにもつながるだろう<sup>註18)</sup>。本額縁の調査が今後の洋画研究の一助となるよう、継続した研究を行いたい。

## 註

\*引用文中、〔 〕で囲われた語は執筆者が便宜上補った言葉を、〔…〕は文章の中略を示す。

- 1) 本稿全体を通じて、長尾建吉ならびに関連書籍については以下の文献を参照した。長尾一平編『嶽陽 長尾建吉』私家版、1936(昭和11)年。
- 2) 長尾建吉『昔語り』『美術新報』第2巻7号、1937(昭和2)年。(『嶽陽 長尾建吉』、p.231より転載)。
- 3) 同上。
- 4) 同上(『嶽陽 長尾建吉』、p.232より転載)。
- 5) 『嶽陽 長尾建吉』、p.91。
- 6) 『嶽陽 長尾建吉』、p.13。
- 7) なお、長尾は第6回白馬会展覧会に自身が所有している西洋のポスター作品を60点出品していることを付記しておく。美術部第二研究室編「研究資料 白馬会出品目録(一)」『美術研究』、東京国立文化財研究所編、1992年(平成4)、pp.93-118。
- 8) 『嶽陽 長尾建吉』、p.9。
- 9) 『嶽陽 長尾建吉』、p.88。
- 10) 『没後50年 白滝幾之助展』(展覧会図録)、姫路市立美術館編、2010年、no.3、pp.8、106-107。
- 11) 『嶽陽 長尾建吉』、pp.136-137。
- 12) 1902年6月7日付けの葉書。『嶽陽 長尾建吉』、p.103。
- 13) 例えば以下の例が挙げられる。跡見泰《海洋の夕陽》(明治34年制作)、大東昌可《残暉》、金澤梯二郎《景色》。いずれも「文相官舎二貸出中、昭和20年5月24日戦災ニヨリ焼失致シタルニ付、昭和26年3月30日除籍」と台帳に記載がある。また、いずれの作品も第6回白馬会展覧会(明治34年開催)に出品されている。
- 14) 白馬会出品作品については以下の文献を参考にした。美術部第二研究室編「研究資料 白馬会出品目録(一)」前掲書;美術部第二研究室編「研究資料 白馬会出品目録(二)」『美術研究』、東京国立文化財研究所編、第355号、1993(平成5)年、pp.159-179;結成100年記念 白馬会——明治洋画の新風』(展覧会図録)、石橋財団プリズトン美術館ほか編、1996(平成8)年;植野建造「研究資料 新出資料紹介『第八回白馬会展覧会出品目録』」『美術研究』、東京国立文化財研究所編、第413号、2014(平成26)年、pp.52-68。
- 15) 西洋の額縁については主に以下の書籍を参考にした。Nicholas Penny, *Pocket Guide: Frames*, National Gallery, London, 1997; D. Gene Karraker, *Looking at European Frames: A Guide to Terms, Styles, and Techniques*, The Paul Getty Museum, Los Angeles, 2014。
- 16) 『嶽陽 長尾建吉』、p.37。
- 17) 宮崎克己『西洋絵画の到来:日本人を魅了したモネ、ルノワール、セザンヌなど』日本経済新聞社、2007年、p.67ほか。
- 18) 国内では過去に額縁を取り扱った展覧会が開催されていることを付記しておく。『画家と額縁——もう一つの美術史』(展覧会図録)、西宮市大谷美術館編、1999年。



東京藝術大学大学美術館  
年報・紀要 [平成31年・令和元年度]

編集・発行：  
東京藝術大学大学美術館  
東京都台東区上野公園12-8 電話 050-5525-2200

制作：  
美術出版社

発行日：  
令和3年3月31日

©2021 The University Art Museum,  
Tokyo University of the Arts  
Printed in Japan  
ISSN 2434-2106

発行者は掲載作品の公開権利所有者ともれなく連絡をとるよう努めましたが、連絡のとれなかった掲載作品の諸権利をお持ちの方または団体は、東京藝術大学大学美術館までご連絡下さい。

The editor has made every possible effort in contacting the copyright holders.  
If the proper authorization has not been granted or the correct credit has not been given, we would ask copyright holders to inform us.